

双鷺と隻鷺

——雍陶「崔少府が池鷺」詩に対する『素隠抄』の解釈をめぐる——

森 博 行

序文

『三体詩』（『唐賢三体詩法』なども称す）は、南宋の周弼（十三世紀の人）が編集した唐詩の選集である。この『三体詩』は、日本では室町時代以来今日まで、愛読され続けてきた唐詩の選集のひとつであり、江戸時代の妙心寺第九十五世紫衣禪師素隠和尚（？～一六二六）による『増註唐賢絶句三体詩法・唐賢七言律詩三体家法・増註唐詩五言律句三体家法』（以後、通称に従って『素隠抄』と略称）は、「最も広く行なわれた」⁽²⁾。『素隠抄』⁽³⁾を読んで、素隠和尚の一種独特の解釈にたいへん面白いと感じるときがある。唐彦謙（八三九？）の「緋桃」（『素隠抄 下』巻八 九四頁～九六頁）と題する七言律詩は、次のような作品である（訓読

は『素隠抄』にしたがった）。

短牆荒圃四無隣 短牆の荒圃 四もに隣無し

烈火緋桃照地春 烈火の緋桃 地を照らして春なり

坐久好風休掩袂 坐久しくして 好風 袂を掩うこ

とを休む

夜來微雨已沾巾 夜來の微雨 已に巾を沾す

敢同俗態期青眼 敢て俗態の青眼を期するに同じか

らんか

似有微詞動絳唇 微詞の絳唇を動かすこと有るに似

たり

尽日更無鄉井念 尽日 更に郷井の念い無し

此時何必見秦人 此の時 何ぞ必ずしも秦人を見ん

素隠は、第5・6句の一聯に対して、次のように説明す

る。

言フココロハ、此ノ花（詩題の緋桃をさす―引用者。以下同じ）ノ意ニハ、阮籍ガ意ノヤウニ酒ヲモチ来ラバ、青眼ニシテマミエント期スルヤウナルイヤシキコトハ、アルマジキトゾ。敢同^{テセンカ}乎トハ、カナラズ同ジフセンヤ、イヤ同ジフハセマイト、自問自答シタル語ゾ。同ノ字ノ下ニカリニ乎ノ字ヲ加ヘテ訓ズベシ。俗態トハ、阮籍ヲサシタゾ。阮籍ガ青白ノ眼ノ故事ニハ、別人ヲサシテ礼俗ト云フタレドモ、コ、ニハ阮籍ヲサシテ俗態ト云タゾ。微詞トハ、宋玉ガ（登徒子）好色ノ賦ニ曰ク、大夫登徒子 楚ノ襄王ニ侍シテ、宋玉ヲ短^ツツテ曰ク、玉 人為ルコト体貌閑麗ニ、口ニ微詞多シ。又性 色ヲ好メリ。願クハ王 与ニ後宮ニ出入セシムルコト勿カレ云云。詩ノココロハ、此ノ花ハ幽微ナルコトバヲノベントテ、美人ノ絳キクチビルヲ動カスヤウニミユルゾ。サテハ此ノ花ノ意ニハ、阮籍ガヤウナルイヤシキ事ハナクテ、誰ニモ詞ヲカケントスルゲナゾ。シカラバ情ケフカキ花ニテアルヨトヲモヒテ、イト、愛賞ノ意ガマシタトゾ（九五・九六頁）。

素隠は、「敢同俗態期青眼」の句を「敢て俗態の青眼を期

するに同じからんか」と訓読し、「俗態の青眼を期する」を、「阮籍ガヤウナルイヤシキ事」と解釈するのであるが、この詩の作者・唐彦謙が「青眼」と表現したとき、「阮籍ガヤウナルイヤシキ事」のごとく、阮籍に対する批判の感情が動いていたかどうかは、検討を要する。結論をいえば、当時の中国人の阮籍に対する評価から判断して、素隠の解釈は、おそらく間違っている。かれが間違った解釈をした原因はふたつあると考えられる。

その一、詩そのものに対する解釈、すなわち素隠は「俗態」を「青眼」を修飾すると解釈したこと。「俗態期青眼」という表現が、詩においては一句内の平仄の関係、あるいは一句内のリズムの関係（五言詩の場合は二・三）で、意味的には「期俗態青眼」（俗態の青眼を期す）であることは、しばしばみられる現象である。しかし、右の詩の場合、「俗態」と「青眼」の文法的関係は、漢文の通常の文法どおり、「俗態」は「期」の主語、それに対して「青眼」は「期」の目的語である。したがって「俗態の青眼を期する」は、訓読上に違いはみられないが、「俗態」の「青眼」ではなく、「俗態」（のやから）が、阮籍の「青眼」を「期」待する、という意味でなければならぬ。

その二、こちらのほうがより大きな原因であるが、その一のような誤釈を生じる結果になったと思われる、素隱の主観的なものの考え方。かれがいう「阮籍ガ青白ノ眼ノ故事」とは、『晋書』「阮籍伝」などに記されているエピソードであるが、素隱がおそらく読んだと思われる庾季昌の「増注」に引用されている文を紹介すると次のとおりである。「阮籍は能く青白眼を作す。礼俗の士を見れば白眼を以つてこれに待す。母終り、嵇喜来たりて弔うに、籍は白眼を作す。喜は憚ばずして退く。喜の弟の康はこれを聞き、酒を齎して造る。籍は悦びて乃ち青眼を見わす。是に由り士はこれを疾めり」。勅を奉じて妙心寺に出世された素隱は、禅宗の由緒正しい僧侶である。贈り物、しかもこともあろうに酒によつて態度を豹変させるなどは、とんでもない「俗態」であると、かれは考えたのではあるまいか。いずれにしても、このような解釈は、素隱の個人的な人生観であつて、唐彦謙の意図とは没交渉である。

ただ、「阮籍ガ意ノヤウニ酒ヲモチ来ラバ、青眼ニシテマミエント期スルヤウナルイヤシキコトハ、アルマジキトゾ」という素隱の阮籍に対する見方が、筆者には面白く感じられるのである。このような見方には、素隱という僧侶

の人となり(5)が彷彿として浮かんでくるかと思われるからである。なおいえば、素隱は誤釈と知りながら、あえてこのように解釈したのではないかとさえ、筆者は想像している。

一、雍陶「崔少府が池鷺」詩

『三体詩』のなかに、雍陶(八〇五?)の「崔少府が池の鷺」と題する七言律詩があり、次のような作品である

〔素隱抄 下〕卷八 八九頁〜九一頁。

双鷺応憐水満池 双鷺 応に憐むべし 水の池に満つことを

風飄不動頂糸垂 風飄えれども動かず 頂糸垂る
立当青草人先見 立ちて青草に当たれば 人先が見る

行傍白蓮魚未知 行きて白蓮に傍えば 魚未だ知らず

一足独拳寒雨裏 一足 独り拳す 寒雨の裏

数声相叫早秋時 数声 相叫ぶ 早秋の時

林塘得爾須增価 林塘も爾を得ば 須らく価を増すべし

況与詩家物色宜 況んや詩家の物色と宜しきをや

まず素隱の解釈の方法について、この詩の解説をもちかへて、紹介しておこう。かれは詩中の言葉について、次のような説明の仕方をする。

憐ハ、愛ゾ。和訓ニハオモシロガルトヨンダゾ。アワレムトヨンデモ、ヲモシロシト云フ意ゾ（八九頁）。

ただし、荻生徂徠（一六六六—一七二八）の『訳文筌蹄』（巻五）「憐」の項によれば、「アハレムトヨム。イトヲシガルコトナリ。（中略）花月ヲ愛賞スルコトヲモ憐レムト云フ。古来オモシロガルト訓ズ。実ハオモシロガルニ非ズ。花月ハヤサシキ物ナルユへ、イトヲシガル意ナリ。」さらに素隱は、次のように解釈して説明する。

林塘トハ、陶ガ居処ノ林下ノ池塘ヲ云フゾ。爾トハ、鷺ニ爾ゾ。詩家トハ、少府が家ヲ指シタゾ。物色トハ、少府ガ池辺ノ風景物色ゾ（九二頁）。

ところで右の詩における素隱の解釈で異彩を放っているのは、第一聯に関する、最初に紹介した文につづく、次のような解釈である。

詩ノ意ハ、此ノ池ノナギサニ鷺ガ一雙立并ンデ居タガ、水ノ池ニ湛々トミチタルヲ、ヲモシロク思フタゲ

ナゾ。サモアレバコソ風ガ飄然トヒルガヘレドモ動カズシテ、頂ノ糸ヲタレテ立チタハトゾ。又ハ鷺ハ只ダ一隻ナルガ、水ガ池ニ満チタル故ニ、其ノ影ガ水ニ移（映におなじ）リテ双鷺トナツタゾ、此ノ鷺モ、友ヲ得タルカト思フテ池水ヲ愛シテ、風吹ケドモ動カズ、立チテ頂糸ヲ垂レタト云フ義モアルゾ。何レニ鷺ハ一隻ナリシヲ、陶ガ作意ニテ双鷺ト云フタゾ。第五句ニ議論ガアルゾ（八九頁）。

この文に「第五句ニ議論ガアルゾ」とあるから、第五句「二足 独り拳す 寒雨の裏」に関する「議論」を見ることにする。

詩ノ意ハ、先ニ池水ニノゾンデ立チテイタル時ニハ、鷺ガ二ツ相双ンデ居タカト思フタレバ、サハナフテ、其ノ一ツハ影ニテアリツルヨ。只今ヨクヨク見タレバ、只ダ独り一足ヲ拳シテ寒雨ノ中ニ立チテ、サテ友ヲコヒテ四五声叫ビタレバ、何方トハシラ子ドモ、又鷺ノ叫ブ声ガキコヘタゾ。コロハイツゾト云ヘバ、早秋ノ時分ニテアリタトゾ。又此ノ鷺ガ先キニハ、水ニ影ノ移リタルヲ見テ、友ヲ得タト思ヒテ、池水ヲ愛シテ居タリシガ、ワズカニ別処ニ行キタレバ、己レガ影

ガミヘヌゾ。ソコニテ友ヲ失ヒタト思ヒテ数声叫ビタレバ、何クトモシラヌ方ニテ相答ヘタゾ。ソノコロヲイヘバ早秋ノ時分ニテアリシトゾ（九〇頁）。

注目すべきは、「鷺ハ只ダ一隻ナルガ、水ガ池ニ満チタル故ニ、其ノ影ガ水ニ移リテ双鷺トナツタ」、「鷺ハ一隻ナリシヲ、陶ガ作意ニテ双鷺ト云フタ」、および「先ニ池水ニノゾンデ立チテイタル時ニハ、鷺ガニツ相双ンデ居タカト思フタレバ、サハナフテ、其ノ一ツハ影ニテアリツルヨ」というところである。「崔少府が池の鷺」は、「双鷺」であったのか、それとも「隻鷺」と池水に映ったその影であったのか。事實は一体どちらが正しいのであろうか。

二、「鷺ハ一隻ナリシヲ、

陶ガ作意ニテ双鷺ト云フタ」という説

まず「鷺ハ一隻ナリシヲ、陶ガ作意ニテ双鷺ト云フタ」という解釈について。周嘯天 張效民 注『雍陶詩注』（上海古籍出版社 一九八八年）に、雍陶の詩に關して、「崔少卿池塘詠双白鷺」（一九頁 原文は簡体字。以下おなじ）という詩題のもとに、次のような説明がある。

本篇当作於長安。崔少卿、当即崔杞。同州刺史崔涼之

子。《新唐書・宰相世系表》：「（崔杞）駙馬都尉。」尚順宗東陽公主。《旧唐書・文宗紀》「（大和八年六月戊申）以將作監・駙馬都尉崔杞為兗海沂密觀察使。」与姚合・王建・賈島・顧非熊等有交往。諸人皆有詩唱和贈答。姚合《題大理崔少卿駙馬林亭》詩：「每來歸意懶、都尉似山人。台榭棲双鷺……」（以下、省略）

本篇は当に長安において作るなるべし。崔少卿は、当に即ち崔杞なるべし。同州刺史崔涼の子。《新唐書・宰相世系表》（卷七十二下第二房崔氏）に「（崔杞）駙馬都尉。」順宗の東陽公主（皇女）を尚す（娶る）。《旧唐書・文宗紀》「（大和八年（八三四）六月戊申（十二日）將作監・駙馬都尉の崔杞を以つて兗海沂密觀察使と為す。」姚合・王建・賈島・顧非熊等と交往有り。諸人皆な詩有りて唱和贈答す。姚合《大理崔少卿駙馬の林亭に題す》詩に「來たる毎に歸意懶く、都尉は山人に似たり。台榭 双鷺棲み……」

雍陶の詩の題が『三体詩』において「崔少府池鷺」となっているのを、『雍陶詩注』においては「崔少卿池塘詠双白鷺」（崔少卿が池塘にて、双白鷺を詠ず）としているのは、『全唐詩』（卷五百十八）では「詠双白鷺」（双白鷺を詠ず）に

作り、「一作崔少府池鷺」（一に「崔少府が池鷺」に作る）と注記があることを確認したうえで、『唐百家詩選』（卷十七）が「崔少卿池塘詠双白鷺」としているからである、と説明されている。さらに『雍陶詩注』の説明にしたがって『全唐詩』（『四庫全書』本）を調べると、賈島と顧非熊にそれぞれ「崔卿が池上の双白鷺」（卷五七四）、「崔卿が双白鷺」（卷五〇九）と題する七言律詩があり、次のようにうたわれている。

賈島「崔卿が池上の双白鷺」

鷺雛相逐出深籠

鷺雛 相逐い 深籠を出す

頂各有糸莖数同

頂に各おの糸有り 莖数同じ

灑石多霜移足冷

石に灑ぐ多霜 足を移して冷かに

隔城遠樹掛巢空

城を隔つ遠樹 巢を掛けて空し

其如尽在灘声外

其れ如んせん 尽く灘声の外に在るを

何似双飛浦色中

何似んぞ 浦色の中に双飛するは

見此池潭卿自鑿

見る 此の池潭 卿自ずから鑿つと

清冷太液底潜通

清冷の太液 底 潜かに通せん

第5句の「其如」は、如何とおなじで、「イカガイタサ

フゾ」（三宅邦『助字審象』卷之下）、第6句の「何似」は、何如とおなじで、「ドファイフワケゾ」（『同右』）。右の詩は、第1句に「鷺雛」、第2句に「頂に各おの」と表現されているから、二羽のヒナ鳥を詠じた。ヒナ鳥を詠じたと理解して解釈すると、第5句の「尽在」、第6句の「双飛」の主語は、ともに親鳥の双鷺であろう。第7句の「見」は、「聞」に同じ。張相『詩詞曲語辞匯釈』（卷五）「見（二）」に「見は猶お聞のごときなり。最も著しき者は則ち見説と為す」。「見説」は「聞説」、「聞説」は「聞説」（『助字審象』卷之下）、つまり聞くところでは、の意。第8句の「太液」は、長安の御所・大明宮にあった池である。「双鷺」の所有者・崔少卿杞は、皇帝の娘婿であった。

顧非熊「崔卿が双白鷺」

朝客高清愛水禽

朝客 高清 水禽を愛す

緑波双鷺在園林

緑波 双鷺 園林に在り

立当風裏糸揺急

立ちて風裏に当たり 糸 揺ぐこと急に

歩遶池辺字印深

歩みて池辺を遶り 字 印すること深し

刷羽競生堪画勢

羽を刷き 競いて画に堪えたる勢

いを生じ

依泉各有取魚心

泉に依り 各おの魚を取る心有り

我郷多傍門前見

我が郷 多く門前に傍いて見る

坐覚煙波思不禁

坐して覚ゆ 煙波 思い禁えざる

を

第1句の「朝客」は崔少卿をさす。第3句の「糸」は頂

糸、第四句の「字」は鷺の足跡。漢字は鳥の足跡をヒントにして発明された。第5句の「画に堪えたる勢い」は、絵になる姿勢。第8句の「坐」は、『助字審象』(卷之上)に

「井ナガラ ヨル」と訓み、「坐ハツガモナクヤスヤストスル意ナリ」と説明され、割注に「後世ノ詩語ニ坐ヲソゴロト訓スルモオルマ、ニツガモナキ処ヲ云ナリ」とある。

「煙波」は、もやの立ち込める川波。「日暮 郷関 何れの処か是れなる、煙波 江上 人をして愁えしむ」、崔顥

「黄鶴楼」詩の最後の一聯である。この一聯に対して素隠いわく「アマリノユカシサニ、故郷ハイヅクノ程ニテヤアルラント臨メドモ、方角ガサ、レヌゾ。只近辺ニアル煙波

江煙波ガ微渺トカスカニ見ユルバカリゾ。ソレヲミルニツケテ、イト、愁ガ生ズルホドニ、サテハ煙波江上ノ煙波ガ我ヲシイテ愁シムルカト思ヒタゾ。サルホド二人ヲシテ

愁イシムルト云タゾ」(『素隠抄 上』卷七 六一六・六一七

頁)。顧非熊の詩がうたわれた場所は、『雍陶詩注』に指摘されているとおり、長安、それに対してかれの故郷は蘇州である。

要するに雍陶の作品は、単独に作られたのではなく、賈島や顧非熊たちとともに崔杞なる貴族が自分の池塘に飼っている「双鷺」を詠じたのである。顧非熊の第3句「立当」と雍陶の第3句「立当」との間には、明らかに影響関係がある。さらに補足すれば、賈島と顧非熊の詩の場合、「頂に各おの糸有り」、「各おの魚を取る心有り」のように、ともに「各おの」とも表現されおり、また『雍陶詩注』に引用された姚合の五言律詩「大理崔少卿駙馬的林亭に題す」詩(『全唐詩』卷四四九)にも、「台榭 双鷺棲む」のごとく、「双鷺」と表現されている。したがって素隠の解釈「鷺ハ一隻ナリシヲ、陶ガ作意ニテ双鷺ト云フタ」という点に関しては、誤解であるとしなければならない。鷺はたしかに「双鷺」であった。

三、「鷺ハ只ダ一隻ナルガ、水ガ池ニ満チタ

ル故ニ、其ノ影ガ水ニ移リテ双鷺トナ

ツタ」という説

次に「鷺ハ只ダ一隻ナルガ、水ガ池ニ満チタル故ニ、其ノ影ガ水ニ移リテ双鷺トナツタ」という解釈について。すでに述べたとおり、鷺はたしかに二羽いたのであるから、この解釈は必然的に成立しない。しかし、第5句の「議論」「先ニ池水ニノゾンデ立チテイタル時ニハ、鷺ガ二ツ相双ンデ居タカト思フタレバ、サハナフテ、其ノ一ツハ影ニテアリツルヨ」という視覚上の錯覚が、三次元世界に住む人間に生じることは、おそらくあり得ないにしても、「鷺ハ只ダ一隻ナルガ、水ガ池ニ満チタル故ニ、其ノ影ガ水ニ移リテ双鷺トナツタ」という解釈には、前節に述べたようなこの詩が作られた背景や他の詩人の同題の作品を考慮しなければ、なかなか捨て難いところがある。「一足独り拳す 寒雨の裏」に対する「只ダ獨リ一足ヲ拳シテ寒雨ノ中ニ立チテ」という解釈と、「数声 相叫ぶ」に対する、おなじ第5句の「議論」「サテ友ヲコヒテ、四五声叫ビタレバ、何方トハシラ子ドモ、又鷺ノ叫ブ声ガキコヘタ

ゾ」という解釈は、「鷺ハ一隻ナリシ」と解釈する根拠として説得力があると思われるからである。たとえば劉長卿は「白鷺」(『全唐詩』卷二四七)と題する五言律詩の前半において、次のようにうたっている。

亭亭常独立 亭亭として常に独り立つ

川上時延頸 川上 時に頸を延ばす

秋水寒白毛 秋水 白毛寒く

夕陽弔孤影 夕陽 孤影を弔う

……………

「独り立つ」は、一羽の鷺が「独り立つ」のであり、「孤影」は、「夕陽」に照らされて水上に映った一羽の鷺の影である。また積清潭は、「双鷺」を「隻鷺」と水に映ったその影ではなく、あくまでも「雌雄の二」と理解したうえで、次のように説明した。「何の為に叫ぶやは動物学者と雖も容易に解し難きも、詩人は侶を喚ぶ為めに相叫ぶと定むるなり」⁶⁾。積清潭がいう「侶」は、連れ合いの意味である。すでに雌雄連れ立っているのに、さらに「侶を喚ぶ為めに相叫ぶ」のはなぜなのか。鷺が連れ添って二羽いるという前提に立つかぎり、「何の為に叫ぶやは動物学者と雖も容易に解し難き」と首をかしげたくなる、と積清潭

はいうのである。このようにみてくると、「一足 独り拳す 寒雨の裏」一句には、一羽の鷺が「独り立つ」姿を表現したという解釈を許容するところがある。ただ、そうはいつても、劉長卿の「白鷺」詩にしても、「其ノ影ガ水ニ移リテ双鷺トナツタ」という発想は見られないということ、はつきりと指摘しておかなければならない。

ところで「鷺ハ只ダ一隻ナルガ、水ガ池ニ満チタル故ニ、其ノ影ガ水ニ移リテ双鷺トナツタ」という解釈は、素隠独自の発想なのだろうか。この「鷺ハ只ダ一隻ナルガ」云々の文が「又ハ」に始まって、「ト云フ義モアルゾ」と結ばれる表現になっている点から判断すれば、先人の解釈のように思える。ただ、谷澤尚一によれば、「素隠抄には衍字を用いないところから、自身の解釈と他抄からの比重が容易にわからず、問題を残している。ただし、それは七絶にのみいえることであって、七律、五律の注釈は、おそらく殆どが素隠の解釈によるものと思われる」ということである。しかし、やはり谷澤尚一によれば、「全部を抄しているのに趙瞻民（日本人）のものもあるらしいが、現存しないようであるから、いまのところ、完全なのはこの素隠抄しかない」ということであり、素隠はこの趙瞻民の抄

を参照していた形跡があるので、慎重を期して、仮に「素隠たち」という言い方で、以後、本稿を進めることにする。けれども素隠と称しても素隠たちと称しても、本稿の趣旨にはほとんど影響しない。

さて「鷺ハ只ダ一隻ナルガ」云々は、まったく素隠たち独自の発想なのであるか。それとも何かヒントになるものがあったのであろうか。次にこの点について少し考えてみたい。

四、楊万里「玉田に晨炊して

鷺を聞き鷺を観る」詩

『三体詩』においてのみならず、唐人の詩に水面に映った「隻鷺」をみて「双鷺」とうたった作品はない。たとえば李嘉祐の五言絶句「白鷺」（『全唐詩』卷二〇七）と題する詩

江南淥水多 江南 淥水多し

顧影逗輕波 影を顧みて 輕波に逗す

落日秦雲裏 落日 秦雲の裏

山高奈若何 山高く 若を奈何せん

や、羅隱の七言絶句「鷺鷺」（『全唐詩』卷六六四）と題する

詩

斜陽淡淡柳陰陰 斜陽は淡淡 柳は陰陰

風裊寒糸映水深 風裊き 寒糸 水に映じて深し

不要向人誇潔白 人に向かいて潔白を誇るを要せず

也知常有羨魚心 也^また知る 常に魚を羨む心有るを

には、一羽の鷺の水面に映る姿が描写されている。李詩第

2句の「逗」は、留まる。羅詩第2句の「寒糸」の「糸」

は、柳糸と頂糸をかけているであろう。柳の枝とともに鷺

のトサカが水に映っているのである。しかし、右に引用し

た李嘉祐の「白鷺」や羅隱の「鷺鷥」、あるいは第三節に

引用した劉長卿の「白鷺」にしても、水面に映った「隻

鷺」の影をとらえてうたっている、

「隻鷺」を「双鷺」と錯覚したと表現されているわけでは

ない。しかし、「隻鷺」を「双鷺」とみてうたった詩人が

確かにいるのである。南宋の楊万里（号は誠齋、一一二七

一一〇六）。かれに「玉田に晨炊して鷺を聞き鷺を観る」

（『誠齋集』卷十三）と題する七言絶句が一首あり、「鷺」を

詠じた「その二」において次のようにうたわれている。

清溪欲下影先翻 清溪 下らんと欲して 影先ず翻

る

隻鷺還將隻鷺看 隻鷺 還^なつて双鷺と將して看る

綠玉脛長聊試淺 綠玉 脛長く 聊か浅を試み

素瓊裳冷不禁寒 素瓊 裳冷く 寒に禁^たえず

「隻鷺 還つて双鷺と將して看る」、「隻鷺」と「清溪」

に映ったその影をとらえて「双鷺」、というのである。楊

万里が本稿において問題にしている雍陶の作品を知ってい

たかどうか、たしかな事はわからない。ただ、雍陶の「双

鷺」の詩がいわゆる唐人選唐詩のひとつ『才調集』（卷五）

に、雍陶の作品としては、「鷺鷥」と題してこの一首のみ

が収録されていること、また唐・范攄の『雲溪友議』「馮

道明」（『太平広記』卷三三九）に「双鷺」の詩の頷聯が著名

な句として引用されていること、あるいは錢鍾書『宋詩選

註』（二七八・一七九頁 人民文学出版社 一九七九・北京）に

よれば、楊万里は晩唐の作品をふかく学んでいたこと、こ

れらの事実から考えて、楊万里が雍陶の「双鷺」の詩を知

っていた可能性がないとはいえない。しかし、楊万里が雍

陶の詩をヒントにしたとしても、かれの「隻鷺」は、「清

溪」に降りようとして、その影を「清溪」に落としながら

空を飛んでいる鷺であるところが、いわばミソである。

「視覚上の錯覚が、三次元世界の人間に生じることは、お

そらくあり得ない」雍陶の池中に立つ「隻鷺」とちがって、水上を飛ぶ「隻鷺」の影をみて「双鷺」と錯覚するという現象は、あり得ることである。吉川幸次郎によれば楊万里の「観察発想も、あるいは甚だ奇抜である¹⁰⁾」。張瑞君の表現を借用すれば「豊富奇特な芸術想像¹¹⁾」。楊万里の右の詩における特異さも、これまでに見られない「奇抜」(「奇特」な「観察発想」(「芸術想像」といってよい。なお、楊万里は、実物と水面に映ったその影によって生じる錯覚という感覚現象に興味を抱いていたようで、本稿と直接の関係はないが、事のついでにもう一例、紹介しておく。「新柳」(巻八)と題する七言絶句である。

柳条百尺払銀塘　　柳条　百尺　銀塘を払う

且莫深青只浅黄　　且くは深青なる莫く　只だ浅黄

未必柳条能蘸水　　未だ必ずしも柳条の能く水に蘸す

のみにあらず

水中柳影引他長　　水中の柳影　他を引いて長きなり

「柳条」(ヤナギの枝)が「百尺」もの長さに見えたの

は、実物と水面に映った「柳条」とが連結していたからであつた、というのである。

素隠たちの解釈である。かれらは楊万里のくだんの作品

を知っていたであろうか。おそらく楊万里に関して、名前は知っていても、作品は知らなかったと思われる。川瀬一馬著『五山版の研究　上巻』(ABAJ 一九七〇)によれば、日本では『誠齋集』は南北朝時代に開板されているが、『誠齋集』の「宋刊本一百三十三卷本の卷九十五のみ抽刻したもの」(四七六頁)にすぎないからである。ちなみに卷九十五は「天問天対解引」である(『五山版の研究　下巻』(一六八頁)の図版を参照)。また吉川『宋詩概説』(二一八頁)によれば、「日本では、江戸末期に、この時期の宋詩が、山本北山を主唱者として、大いに読まれ、(中略)文化五年、一八〇八に「楊誠齋詩鈔」が、いずれも北山の序文を冠して和刻されている」。山本北山は、素隠たちよりはるか後代の人物である。素隠たちは楊万里の作品を読む機会がなかったであろう。ちなみに筆者の知るかぎりでは、『素隠抄』において楊万里に言及されるのは、「季昌本ノ注ニ云ワク、李咸用ガ元集ニ紹熙ノ間、楊誠齋為メニ序ヲ作りテ唐末ノ人ト称ス¹²⁾」のみである。

結局のところ、中国の詩に素隠たちの解釈に対して確かにヒントを与えたと思われる作品が見当たらない。「鷺ハ只ダ一隻ナルガ、水ガ池ニ満チタル故ニ、其ノ影ガ水ニ移

リテ双鷺トナツタ」、まったく素隠たち独自の発想なのだろうか。

五、紀貫之および民部卿為家の和歌

素隠たち当時の知識人が、漢詩に対してのみならず、日本古来の和歌に対しても造詣が深かったことは、周知の通りである。素隠たちも例外ではなかったであろう。一例を挙げれば、『素隠抄 上』（巻三 二六五頁）所収の張籍「秋思」詩の第1句「洛陽城裏見秋風」に対して、「張翰ガコトニモ覽秋風起トアルホドニ、アマリニ妙デモナイゾ。サテ倭歌ニモ、秋キヌト、目ニハサヤカニミヘ子ドモ、風ノヲトニゾヲドロカレヌル、トヨメリ。此ノ詩ニヨクアフタゾ」と、『古今和歌集』所載の藤原敏行の歌を援用して説明している。⁽¹³⁾ 筆者は素隠たちと違って、和歌に関してはまったく無知であつて、この方面に関しては、和歌の専門家である阪口和子教授にお尋ねしなければならぬが、『古今和歌集』「巻第二春歌下」おなじく「巻第五秋歌下」に、撰者でもある紀貫之（八六八？～九四五？）および紀友則（？～九〇七）の次のような歌がそれぞれ収載されている。

吉野川岸の山吹ふく風にそののかげさへ移ろひにけり
ひともと思ひし菊を大沢の池のそこにも誰か植ゑけ
む

この二首はともに「水に映つた花」を実物に見立てた手法⁽¹⁴⁾によつて表現された作品である。貫之はこういう手法にいたく興味を持っていたようで、『土佐日記』の正月十七日の条に、次のような記事と歌とが記されている。⁽¹⁵⁾

くもれるくもなくなりて、あかつきづくよいとおもしろければ、ふねをいだしてこぎゆく。このあひだに、くものうへもうみのそこも、おなじごとくになんありける。むべもむかしのをとこは、「さをはうがつ、なみのうへのつきを。ふねはおそふうみのうちのそらを。」とはいひけん。き、されにきけるなり。また、あるひとのよめるうた、

みなそこのつきのうへよりこぐふねのさをにさは
るはかつらなるらし
これをき、て、あるひとのまたよめる、

かげみればなみのそこなるひさかたのそらこぎわ
たるわれぞわびしき

右の文の「むかしのをとこ」は、唐の詩人・賈島、鍵カ

ツコ内の表記を漢字に書き改めると、「棹穿波底月、船圧水中天」である（賈島のこの詩句は、現在では『菴溪漁隱叢話』前集卷第十九「孟東野 賈浪仙」などによって知ることができ）。貫之は「漢詩の手法を積極的にとりこんでいった代表的人物⁽¹⁷⁾」といわれるごとく、『土佐日記』の「みなそこの」と「かげみれば」の二首の和歌は、賈島の詩句から着想と啓示とをえた作品であるが、本来、唐人の発想であるけれども（李白や杜甫の詩にもある）、水に映る影を実物に見立てるといふ、『古今和歌集』の撰者であり、その代表的作者でもある貫之がとりわけて好んだ手法が、その後和歌の世界に継承されて、後世の文学にまで影響を与え続け、およそ和歌を素養とする知識人にとって、実物とその影という組み合わせは、自明のパターンであったのではあるまいか。芭蕉の名句「名月や池をめぐりて夜もすがら」も、天上の名月と池中のその影という伝統的なパターンを歴史的に背負って生まれた作品と考えることができるであろう。

ところで右に引用した『古今和歌集』所載の二首の歌にうたわれているのは、山吹と菊の花であったが、鷺の場合はどうだろうか。鎌倉時代の私撰集『夫木和歌抄』⁽¹⁸⁾卷二十

七「鷺」に、民部卿為家（藤原定家の子。一一九八―一二七五）がうたった次のような和歌が収載されている。

ある鷺のかげさへそこに立ちそひてみぎはにまさるかもの川なみ

この歌は、白鷺と「かもの川」の水面に映るその影をとらえ、「かもの川」に映る白鷺の白い影のために、「かもの川」の白波が「まさる」という趣向をうたった作品である。この和歌も「隻鷺」をみて「双鷺」と錯覚したと表現されているわけではないけれども、白鷺の影によって「かもの川」の白波が「まさる」というのは、一種の錯覚を利用した機知的表現である。しかもっと重要なのは、実物と水に映るその影という伝統的な形が踏襲され、鷺をうたう場合にも応用されている、という事実である。

以上、右に略述したことから考えて、素隠たちが雍陶の「崔少府が池鷺」詩の一句「一足 独り拳す 寒雨の裏」に直面したとき、かれらにとって実物の鷺から川面に映るその影という連想は、いとも容易ないわば自然な流れではなかったであろうか。「鷺ハ只ダ一隻ナルガ、水ガ池ニ満チタル故ニ、其ノ影ガ水ニ移リテ双鷺トナツタ」という素隠たちの解釈は、たとえば民部卿為家のくだんの和歌が思い浮

かばなかったとしても、あるいは知らなかったとしても、実物と水に映るその影という和歌創作における伝統的思考が、素隠たちの頭の中におのずから働いた結果、生まれたものと考えることはできまいか。

六、白居易・李白と雍陶

素隠たちが「其ノ影ガ水ニ移リテ双鷺トナツタ」と解釈したのは、素隠も「只今ヨクヨク見タレバ、只ダ独リ一足ヲ挙シテ」云々と述べているように、雍陶の詩そのものについてこのように解釈を生む要素が内在しているからである。そこで雍陶の詩の解釈に関して、ここに卑見を述べておこう。

雍陶は作詩にあたって、まず「双鷺」の所有者である崔杞に対する儀礼として、詩の冒頭に「双鷺」を置き、

双鷺 応に憐むべし 水の池に満つことを

とうたつた。ところで雍陶は己れの作品を創作するに際して、おそらく先人の作品を参考にしたであろう。白居易（七七二〜八四六）に「白鷺」（『白氏長慶集』巻十五）と題する詩があつて、次のように詠ぜられている。

人生四十未全衰

人生 四十 未だ全くは衰えず

我為愁多白髮垂

我れ愁いの多きが為に白髮垂る

何故水辺双白鷺 何故に 水辺の双白鷺

無愁頭上亦垂糸 愁い無くして頭上に亦た糸を垂る

る

この詩の冒頭の句に「人生四十」とあるから、この詩は、元和六年、八一―、白居易が四十歳のときに作られたと思われる。ところで『雍陶詩注』に「崔少府が池鷺」詩は「当に長安において作るなるべし」と記されていたが（本稿第二節）、この一文に補足をくわえれば、雍陶がこのとき長安にいたのは、科挙受験のためであり、若い時代のことである。荒井健「賈島」（『中国文学報 第十冊』所収）によれば、「元和十一年（八一六）に科挙に合格した姚合は、その三年ばかり前から長安へ来て受験生活に入っており、同じころ科挙を目ざし始めた賈島を知るようになった」と推測される。姚合・賈島グループの芽ばえはここに生じたわけである。この集団に属する詩人は、交友関係の存在を示す作品から推定すると、少くとも以下の十二人がかぞえられる」（六八頁）として、この十二人のなかに雍陶が入っている。また雍陶に「再び下第して、將に荆楚に帰らんとして、白舎人に上る」（『全唐詩』巻五百十八）と題する詩があつて、雍陶は、長安にいたとき、「白舎人」つまり中

書舎人であつた白居易と知り合ひであつたことがわかる。

白居易が中書舎人であつたのは、長慶元年（八二一）五十歳）十月から同二年七月まで（『雍陶詩注』五二頁を参照）。

したがつて白居易の「白鷺」詩は、雍陶の「崔少府が池鷺」詩より前に作られた作品である（蛇足ながら、雍陶の生年を八〇五年としたのは、聞一多『唐詩大系』によつたのだが、科挙は一般に正月に実施、二月に合格発表されることになつてゐるから、この「再び下第して、將に荆楚に帰らんとして、白舎人に上る」詩の制作年は、おそらく長慶二年（八二二年）であると考えられることから判断して、かれの生年は、『雍陶詩注』「前言」（一頁）において指摘されてゐるとおり、もう少し早いと思われる）。

なお、雍陶が白居易に知遇を求めたのは、いうまでもなく科挙受験に関係する。唐代には科挙受験をまえに、一流の文学者にせつせと文学作品を示して、おのれの才能を誇示する一種の事前運動が許されていたが（権徳輿（七五九—八一八）のごときは、中書舎人の身分で知貢挙（主任試験官）を務めたことがあり（韓愈「唐故相権公墓碑」『朱文公校昌黎先生集』卷三十）、かれが出題した試験問題がかれの詩文集『権載之文集』卷四十に収載されている）、白居易は受験生にたいへん

人氣があつたらしく、五代・王定保『唐摭言』卷二「争解元」に次のような逸話が記録されている。「白楽天 杭州に典せしとき、江東の進士 多く杭に奔りて取解す」。白楽天（白居易）が杭州の知事であつたのは、長慶二年（八二二—五十一歳）から同四年の三年間。「取解」は解試（科挙の第一段階）を受けること。荒木敏一『宋代科挙制度研究』（東洋史研究会 一九六九年）に詳しい。ここに参考までに「再び下第して、將に荆楚に帰らんとして、白舎人に上る」詩を引用すると、次のような作品である。

窮通応計一時間 窮と通とは 応に計るべし 一時の間なりと

今日甘従刖足還 今日 甘んじて刖足げつそくに従いて還ら

長倚玉人心自酔 長つねに玉人に倚り 心自のずから酔

不辭歸去哭荆山 辭せず 歸り去り 荆山に哭する
を

第3句の「玉人」は、「刖足」つまりにせの玉を献上したとして脚きりの刑罰を受けた楚人の話からの連想で、「玉」の鑑定者を意味するが、右の場合は、白居易をさ

す。「心自のずから酔」っているゆえ、「長に玉人に倚り」かかるのである。雍陶は科挙に再度落第して「荆山」にかえるにあたって、この詩をつくって白居易に贈り、愚痴をこぼしたのである。事のついでに言えば、雍陶が落第した同じ年に白居易の従弟白敏中が及第しているが、雍陶の合格は、右の詩を作ってから十二年をへた、大和八年（八三四）のことである（『登科記考』卷十九および卷二十一）。

右述した事実より考えて、雍陶が「崔少府が池鷺」詩を作ったとき、白居易の「白鷺」詩も知識にあったことは、まず間違いがない。なお、白詩の場合、詩中に「双白鷺」と表現されている以上、この鷺は「双鷺」、そして「双鷺」であるゆえに「愁い無くして」なのである。かくて雍陶は白居易の「白鷺」詩「愁い無くして頭上に亦た糸を垂る」をヒントにして

風飄えれども動かず 頂糸垂る

と、第2句を詠出した。

しかし、雍陶にもかれなりに工夫があつて独自の表現をした。

立ちて青草に当たれば 人先ず見る

行きて白蓮に傍えば 魚未だ知らず

素隠いわく「三四句ノ一聯ニハ、意ヲ用ヒテ詠物ヲ形容スルコトガ、過半綿密ナルゾ」¹⁹。また清の賀裳は『載酒園詩話』（卷一）において、「『立ちて青草に当たれば 人先ず見る、行きて白蓮に傍えば 魚未だ知らず』は佳絶と謂うべし」と評した。「白鷺」が「青草に当た」るゆえに「人先ず見る」、「白蓮に傍」るゆえに「魚未だ知らず」と「白鷺」と「青草」、「白鷺」と「白蓮」のごとく、色彩を巧みに組み合わせる表現したところを「絶佳」と評されたのである。

しかし、後半に移って、第5句

一足 独り拳す 寒雨の裏

と表現されたが、この「一足 独り拳す」は、「双鷺」の表現なのか、それとも「隻鷺」の表現なのか、きわめて不明瞭である。ポイントは、「独り拳す」の「独り」が鷺をさして表現されたのか、つまり「隻鷺」、それとも鷺の足をさして表現されたのか、つまり詩の文脈から考えて「双鷺」、という点にある。もし前者だとすると、この句まで「双鷺」が描写されていたはずだから、あまりの唐突感を免れない。どうしてこのような表現になったのであろうか。実際に雍陶が眼にした鷺の姿が「一足 独り拳す」と

いう状態であったと考えられるが、やはり先人の作品との関連で考えてみよう。雍陶は詩の構想を練っているうちに思い出したのが、李白（七〇一〜七六二）の「白鷺鷥を賦し得たり、宋少府の三峡に入るを送る」（『李太白全集』卷十八）と題する詩である。李白は在世中から世間によく知られた大詩人である。雍陶が李白のこの詩を知らないとは考えにくい。「白鷺鷥」は次のような作品である。

白鷺拳一足 白鷺 一足を拳し

月明秋水寒 月明らかにして秋水寒し

人驚遠飛去 人に驚き 遠く飛び去り

直向使君灘 直ちに向かう 使君灘

注意しなければならないのは、李詩の第1句「白鷺一足を拳し」である。雍陶は李詩のこの句を模倣したのである。かれの心のなかにはおそらく、鷺の生態の勘所をおさえた「一足を拳し」という巧妙な表現が、ふかく刻まれていたのではない。ところで李詩の「白鷺」は、詩題にも詩中にも「双鷺」とも「隻鷺」とも表現されているわけではないが、「隻鷺」と理解したほうがこの詩にはふさわしい。この「白鷺」は「三峡に入る」宋少府（宋陟なる人物）の比喩と読めるからである。あなたも一気に「使君灘」に向

かわれることでしょう。かくて李白の詩句に触発された雍陶は、「双鷺」とも「隻鷺」とも甚だあいまいな状態のまま、「一足 独り拳す 寒雨の裏」と表現した。そしてこの一句に対応するかたちの句として、第6句に

数声 相叫ぶ 早秋の時

をおいた。その結果、「一足 独り拳す 寒雨の裏」が、「双鷺」から「隻鷺」の描写に移った（とはっきり理解される）ような表現に変わってしまったのである。「数声 相叫ぶ」のは、すでに指摘したとおり、「侶を喚ぶために相叫ぶ」ためである、と解釈できるからである。かくて雍陶の詩の前半は「双鷺」を詠じていたにもかかわらず、後半の

一足 独り拳す 寒雨の裏

数声 相叫ぶ 早秋の時

にいたって、「隻鷺」となってしまった。少なくとも素隠たちに、「隻鷺」とも理解されるような、「隻鷺」か「双鷺」か、不明瞭な表現になってしまったのである。素隠いわく、「此ノ一聯ハ、前聯ノ様ニ綿密ニハナイゾ、イワユル未ダ称フコト能ハザル者ゾ」²⁰。

七、兪琰の解釈

結局のところ、雍陶の「崔少府が池鷺」詩の「池鷺」は、「双鷺」の表現なのだろうか、それとも「隻鷺」の描写なのだろうか。結論をくだすまえに中国人の見解を一例紹介しておきたい。「一足 独り拳す 寒雨の裏」の一聯に対して、中国の学者も理解に苦しんだらしく、素隠たちとは違った観点から解釈を試みているからである。

素隠たちの「鷺ハ只ダ一隻ナルガ、水ガ池ニ満チタル故ニ、其ノ影ガ水ニ移リテ雙鷺トナツタ」という解決法はおもしろいけれども、事実を誤認しているところが致命的であった。しかし、解決法がないこともない。最初はたしかに「此ノ池ノナギサニ鷺ガ一雙立并ンデ居タガ、水ノ池ニ湛々トミチタルヲ、ヲモシロク思フタゲナゾ」。しかし、いつのまにか「双鷺」の一羽が飛び去ってしまい、あるいは作者の視野から消えてしまって、「只ダ獨リ一足ヲ拳シテ寒雨ノ中ニ立チテ、サテ友ヲコヒテ、四五聲叫ビタレバ、何方トハシラ子ドモ、又鷺ノ叫ブ聲ガキコヘタゾ」という事態、つまり「隻鷺」になった、と解釈するのである。宋末元初の兪琰（一一五八―一三二四）は、『書齋夜話』

（卷四）において、次のように記している。

唐人鷺詩中間兩聯云、立當青草人先見、行傍白蓮魚不知、兩足独拳寒雨裏、数声相叫晚秋時。雖掩其題目、皆知其為咏鷺。予疑秋字當作煙字尤切當。蓋相失於晚煙中、是以相叫。若晚秋相叫、則無意味矣。

唐人鷺詩の中間の兩聯に云えらく、立ちて青草に当たれば 人先ず見る、行きて白蓮に傍えば 魚知らず、兩足 独り拳す 寒雨の裏、数声 相叫ぶ 晩秋の時、と。其の題目（詩題）を掩うと雖も、皆な其の鷺を咏ずると為すことを知る。予れ疑うらくは秋の字 當に煙の字に作りて尤も切當なるべしと。蓋し晚煙の中に於いて相失い、是を以つて相叫ぶなり。若し晚秋に相叫ばば、則ち意味無からん。

「晚煙（夕方のもや）の中に於いて相失い、是を以つて相叫ぶなり」、兪琰は「晚煙の中」で連れ合いを見失った「隻鷺」が、連れ合いを求めて「相叫ぶ」と解釈し、連れ合いを見失う情景としては、「晚秋」（『三体詩』は「早秋」よりも「晚煙」と表現したほうが適切である、というのである。原詩の「早秋」が「晚秋」と表記されている点ともかくとして、合理的に解釈しようとする結果、「晚煙」

に書き改めるべきであるというところに問題が残るけれども、最初は「双鷺」を描写していたが、いつのまにか「隻鷺」の表現に移った、と解釈するのである。兪琰の詩文集『林屋山人漫藁』（『続修四庫全書』所収）には、いわゆる詠物詩は見当たらないが、かれの観察力にも捨てがたいところがある。なお、原詩の「一足」が、兪琰の引用文では、「両足」と表記されているが、二本足あるのに一足で立っている、という意味であろう。

いずれにしても実物とその影という伝統的な創作手法が暗黙のうちに作用している素隠たちの日本人的解釈、「四時の温涼寒暑は、蓋し皆な太陽の遠近に由りて然るなり」（『書斎夜話』卷三）の一文にしめされる合理的思考の持ち主・兪琰の中国人的解釈、両者の分析方法は、まったく違っているけれども、「隻鷺」という点では期せずして一致しているところは、はなはだ興味深いことである。

結 語

日本人的解釈と中国人的解釈、どちらが正しいかはともかくとして、一聯ごとにまるでモザイクをはめ込むかのようにして構成された雍陶の「崔少府が池鷺」詩には、たし

かに素隠たちや兪琰のような解釈を許容する要素があるが、第六節に引用した清の賀裳は、引用した文に続いて、「一足 独り拳す 寒雨の裏、数声 相叫ぶ 早秋の時」に至りては、すでに俗韻を成す。此れ粘皮带骨の累なり」と評した。「粘皮带骨」とは、紋切り型のありきたり、という意味である。「一足 独り拳す 寒雨の裏、数声 相叫ぶ 早秋の時」に対して、「俗韻」の「粘皮带骨」と酷評される結果になったのは、一句の意匠に精魂をかたむけすぎるあまり、作品の構造全体に対する配慮にかけてしまいい、「一足 独り拳す 寒雨の裏」が、「隻鷺」の表現なのか、それとも「双鷺」の描写なのか、作者自身がはっきりと意識しないで表現したことに、その原因があるのではあるまいか。

しかし、「鷺ハ只ダ一隻ナルガ、水ガ池ニ満チタル故ニ、其ノ影ガ水ニ移リテ双鷺トナツタ」にとらわれて、「隻鷺」と「双鷺」にこだわるというようことがなければ、あるいはまた兪琰のように「晚秋」を「晚煙」に表現しなすなくとも、次のような解釈が可能である。

冷たい雨のなかに、片足をかがめて立ち
さわやかな秋のはじめに、幾声か呼び交わす

村上哲見『三体詩 上』(四七七頁)の訳語である。いうまでもなく「二双立并ンデ居」る「双鷲」の描写として解釈されている。「俗韻」の「粘皮带骨」なる作品に、よけいな紙数を費やしすぎたようだ。

注

- (1) 谷澤尚一「三体詩〔素隠〕抄と説心慈宣」(『文献』第十二号)所収。参照。なお、川上孤山著 荻須純道補『増妙心寺史』(思文閣 昭和五十三年四月)三五四頁の表および三五六頁上段に引用の論旨によれば、紫衣禪師は、内大臣正一位の官に準じる。
- (2) 村上哲見『三体詩』「解説」二二三頁 新訂 中国古典選第17巻 朝日新聞社 昭和42年。
- (3) 『素隠抄』は、中田祝夫編 抄物大系『三体詩素隠抄 上・下』(勉誠社 昭和52年)による。ただし、本稿に引用する場合、送り仮名、カタカナの表記、句読点など読みやすいように改めたところがあり、また漢字は新字体に改めた。
- (4) 『増註三体詩』巻之二(富山房『漢文大系 二』所収 六二頁)
- (5) 『素隠抄』にみられる素隠の人物については、平泉澄『我が歴史観』「十三 歴史に於ける実と真」(三五六頁以下 至文堂 大正十五年五月)が参考になる。

- (6) 『国訳三体詩』四四六頁 国訳漢文大成 文学部 第六巻 大正十三年三版。
- (7) 『三体詩素隠抄 下』「解説」六四一頁。
- (8) 『同右』六四〇頁。
- (9) たとえば『素隠抄 上』(巻二 二四一頁) 鄭谷「十日菊」(七絶)に「趙瞻民ガ義ニハ」云々、あるいは『素隠抄 上』(巻五 四九四頁) 許渾「題飛泉觀宿龍池」(七律)に「此ノ詩ハ藏頭ノ格ト、趙瞻民ガ評シタゾ」のごとく、趙瞻民の抄(おそらく『三体抄義』なる書物)が引用されている。趙瞻民の抄のタイトル名が『三体抄義』である点については、中田祝夫編 抄物大系『三体詩玄雲抄』の坪井美樹の「解説」(六四一頁)に引用されている一文を参照。
- (10) 『宋詩概説』二二四頁(中国詩人選集二集 第一巻 岩波書店 昭和三十七年十月)。
- (11) 『楊万里評伝』一〇六頁(中国思想家評伝叢書95 南京 大学出版社 二〇〇二年三月)
- (12) 『三体詩素隠抄 下』(巻九 一九〇頁)。なお、楊万里の文は、「唐李推官披沙集序」と題して『誠齋集』(巻八十一)に収められている。「披沙」は、李咸用の号。
- (13) なお、復本一郎『芭蕉に「さび」の構造』第二章 第一節 前代からの照射―素隠の「さび」―(塙書房 昭和48年4月)を参照。
- (14) 校注・訳者 小沢正夫『古今和歌集』(一四七頁 昭和

46年4月 小学館)。なお、『古今和歌集』からの引用は、同書による。

- (15) 大岡信は、貫之は「あるものを見るのに、それをじかに見るのではなく、いわば水底という「鏡」を媒介としてそれを見るとき逆倒的な視野構成に」「強く惹かれていたらしい」と記している。『日本詩人選7 紀貫之』六九頁（筑摩書房 昭和四十六年九月）。また貫之の辞世の歌は、「手にむすぶ水にうつれる（宿れる）月影のあるかなきかの世にこそありけれ」といわれるが、藤岡忠美は『王朝の歌人4 紀貫之 歌ことばを創る』（二四〇頁 集英社 一九八五年）において、「水に映った月影のイメージは貫之がくりかえし愛用し、そして彼のなかに定着していた発想型だった」と述べている。

- (16) 鈴木知太郎 校注本（『日本古典文学大系20』岩波書店 一九五七年）。

- (17) 藤岡忠美『王朝の歌人4 紀貫之 歌ことばを創る』五八頁。

- (18) 『校註国歌大系第廿二巻』二七四頁（国民図書 昭和五年十一月）。

- (19) この一文は、「詠物」に関する周弼の説明文「特リ前聯ハ意ヲ用フコト頗ル密ナリ。後聯ハ未ダ称フコト能ハズ」に対する素隠の解釈である。

- (20) 注(19)を参照。

（本学日本語日本文学科教授）